男子がクラスの女子の全裸を見て学ぶ保健の授業

とある高校の2年A組の男子たちは、週に一度の保健の授業のために、特別教室に集められていた。前週、男子たちが全裸で女子たちの視線に晒された地獄のような屈辱は、彼らの心に深い傷を刻んでいた。あの日、田中悠斗、佐藤健太、内藤翔太、山本大輝、鈴木涼太は、女子たちの

嘲笑、好奇心剥き出しの視線、容赦ない質問にプライドを粉々にされ、精神をズタズタにされた。教室の窓には厚いカーテンが引かれ、蛍光灯の冷たい光が室内を無機質に照らす。男子たちは燃え上がる復讐心と下劣な欲望に支配され、獣のようなざわめきを上げながら席に着いた。担任の佐藤美奈子先生が教壇に立つと、ざわめきが一瞬静まった。

「今日の授業は、性教育の特別カリキュラムです。女性の身体を直接観察し、その構造と個人差を学びます」と佐藤先生が落ち着いた声で告げた。黒板には「女性の身体：構造と個人差」と大きく書かれ、プロジェクターで教科書の図版が投影されている。

悠斗は「マジか！やっと女子を地獄に突き落とす番だ」と隣の健太に囁き、目は血走っていた。健太は「前回の屈辱、絶対に忘れねえ。沙雪未

の泣き顔、めっちゃ楽しみ」と歯を剥き、復讐の炎を燃やした。翔太は「あの時、俺のおちんちん笑われたからな。今日は女子が号泣する番だ」と拳を握り、怒りが爆発寸前だった。大輝は「弥奈の生意気な態度、叩き潰してやる」とニヤリと笑い、教科書を床に叩きつけた。涼太は「また恥ずかしい思いしたくねえ…でも、女子が同じ目に遭うならガン見してやる」と目を伏せ、抑えきれない期待で身体が震えた。

佐藤先生は淡々と続けた。
「前回、男子たちが協力したように、今回は女子5人にボランティアとして協力してもらいます。教育的意義を理解し、真剣に取り組んでください」

その言葉に、男子たちの目が野獣のように輝いた。

「やっと復讐だ！」「あのクソ女どもの笑い声、絶対後悔させてやる！」と下劣な興奮と復讐心に満ちた咆哮が教室を揺らした。悠斗が「ここで女子が全部脱ぐの最高すぎるだ

ろ！」と立ち上がり、拳を振り上げ、ズボンの中でおちんちんが早くも硬くなり始めた。健太は「前回の恨み、全部ぶつけてやる！おっぱいも股間もガン見だ！」と目を血走らせ、椅子を蹴り飛ばした。翔太は「女子の恥ずかしがる顔、全部焼き付ける」と下品に笑い、大輝は「誰が来る！？沙雪未とか弥奈いたら完璧！」と目をギラギラさせ、涼太は「前回の屈辱、絶対晴らす」と震える声で呟き、股間が熱くなった。

佐藤先生は「騒がない。女子たちは了承済みで、教育的目的のために参加します。敬意を持って学びなさい」とピシャリと言ったが、男子たちの耳には届かず、欲望と復讐心が脳を支配していた。教室の後ろのドアが開き、5人の女子——梨緒、沙雪未、可菜子、弥奈、花香——が真っ赤な顔で、恐怖と羞恥に身体をガタガタ震わせながら入ってきた。彼女たちの目は絶望に濡れ、前週の男子たちの屈辱を思

い出し、自分たちが同じいやそれ以上の地獄に突き落とされる恐怖で息もできないようだった。

女子たちが教壇の前に並ぶと、男子たちの視線がまるで飢えたハイエナのように彼女たちの全身を貪り尽くした。5人は等間隔で立ち、クラス全員の目に晒される位置に整列した。教室の空気は一変し、男子たちの視線は女子たちの制服を剥ぎ取るように動き、復讐心と下劣な興奮で異

様な熱気を帯びていた。悠斗は「梨緒ちゃん！前回、俺のおちんちんジロジロ見て笑ったよな！」と目を血走らせ、健太は「沙雪未、お前、俺のおちんちん『ちっちゃい』ってほざいたよな！？」と唾を飛ばして叫んだ。大輝は「弥奈、いつも強気なくせに、今どんな顔だ！？おっぱい見せてみろよ！」とニヤニヤし、涼太は「花香…前回、俺のおちんちん『愛らしい』とか言ったよな」と復讐心を剥き出しに、視線

が彼女のおっぱいに吸い寄せられた。翔太は「可菜子、俺の亀頭『きれい』とか言ってたな。お前のおっぱいと股間、全部晒せよ」と下品に笑い、視線が彼女のおっぱいと股間に突き刺さった。男子たちのおちんちんはすでに全員がフル勃起し、ズボンの中で痛いほど脈打っていた。

佐藤先生が冷たく指示を出した。「では、女子たちは一斉に制服と下着を全て脱ぎ、正面を向いて立ってください。男子

たちは観察し、質問があれば挙手してください。教育の一環なので、真剣に取り組むこと」

その言葉に、女子たちの顔が恐怖と絶望で真っ白になり、男子たちからは「うおお！」「やっとだ！」「全部脱げ！」「前回の恨み、全部ぶつけるぞ！」という野獣のような咆哮が爆発した。梨緒が「やだ、こんなの…死にたい！」と絶叫し、両手でおっぱいを隠し、身体を縮こませた。沙雪未は

「前回の仕返し！？こんなの…人間のやることじゃない！」と涙で顔をぐしゃぐしゃにし、可菜子は「見ないで…お願い、もう生きていけない！」と床に膝をつきそうになり、膝がガクガク震えた。弥奈は「こんな屈辱…絶対許さない」と歯を食いしばったが、声は震え、目が涙で潤んだ。花香は「やめて…お願い、神様、助けて」と嗚咽を漏らし、涙が滝のように流れ落ちた。男子たちの視線はそんな女子たちの反応を

さらに煽り、まるで獲物を八つ裂きにする猛獣のように彼女たちのおっぱい、腰、股間を貪り尽くした。悠斗のおちんちんはズボンを突き破りそうなほど勃起し、ズボンの前が目に見えて膨らんでいた。健太も同じくフル勃起で、ズボンの中でおちんちんがピクピク動き、興奮で息が荒かった。

佐藤先生が「早くしなさい。時間はありません」と急かすと、女子たちは絶望の淵で震えながら、死にそうな表情で動き

始めた。教室は男子たちの下劣な興奮と女子たちの魂が砕けるような恐怖が交錯する地獄と化し、男子たちの視線は女子たちの身体を一ミリも逃さず貪った。5人がほぼ同時に脱ぎ始め、衣擦れの音が響く中、男子たちの視線はまるで肉を切り裂くナイフのように彼女たちのおっぱい、腰、股間に突き刺さった。悠斗の目は梨緒のおっぱいに、健太の目は沙雪未の腰とおっぱいに、翔太の目は可菜子の股

間とおっぱいに、大輝の目は弥奈の爆乳に、涼太の目は花香の華奢なおっぱいに、それぞれ釘付けだった。

梨緒は、「こんな屈辱…死んだ方がマシ」と心の中で絶叫しながら、ブレザーを脱いだ。白いブラウスを震える手で脱ぐと、白いレースのブラジャーが現れ、Bカップのおっぱいが柔らかく揺れた。肌は雪のように白く、ブラから乳首の淡いピンクの輪郭が薄っすら透け、胸の谷間が控えめに覗い

ていた。悠斗が「梨緒ちゃん、前回俺のおちんちんガン見して笑ったよな！そのおっぱい、めっちゃエロい！」と下品に哄笑し、視線が彼女のおっぱいから股間に滑り落ちた。スカートを下ろすと、ペールピンクのパンティが露わに。健太が「うわ、パンツも可愛い！でもすぐおっぱいと股間丸見えだな！」とニヤニヤし、視線がパンティの膨らみとおっぱいに集中。梨緒は「やめて…お願い、死にたい！」と泣き叫

び、ブラとパンティを一気に下ろした。